

(小説)

出 人 議員

――釜ヶ崎 余聞――

寺 閑 一

今年は暖冬異変だ。寒に入っても、小春日和がつづいた。有難いことに、凍死した行倒れの噂もない。麗かな

日差しに、三角公園のベンチはどれも満席で、篠懸、柳とこきまぜた樹木にも、春のもたらし気配が匂う。

風が運んできた足元の新聞に、ピコやん、紙面一杯の、選挙の記事が目についた。

「統一選挙、秒読みの段階に入ってるか。与一よ、もう選挙かいな？」

ピコやん、与一に問のびのした声をかけた。

「選挙……選挙てかい。選挙は去年の夏から、とうに始まっとるがな」

身をつつむ、春、春春を満喫の与一は、物長げに答え

「毎年やりよる、柿岡会の裏面ガーデンでのパーティーは無かったんか」

舌なめずって聞いた。

「幹部級だけに、しぼってやりよったらしいで」

極秘の情報でもあるように、小さい声で与一はささやいた。どっちも、お招きにあづかれる顔でもない。

「懐なこっちゃ！ 飲まして、喰わして、握らしてか。こんなことで、日本の選挙は、いつの日に、ようなるん

じゃい」

そーら、ピコやんのハッターの虫が、首をもたげた。

「ほんまに、ほんまに。なげかわしい、選挙の実状や」

ピコやん、大袈裟に天を仰いで、長嘆息をした。

「ピコやん。どや、釜ヶ崎日雇労働者の為に、一丁、奮起とやらんかい」

そこはツーカーの間柄。与一すかさず、合の手を入れた。

「うーん。の……」

ピコやん、物々しく顎ひげをなでた。

「この前の選挙で、この釜ヶ崎からも、日雇の代表が出よったんや」

ピコやん、せきこんで聞いた。

「そいで、どないやった」

「去年の夏からやて……そいつは一寸も知らなんだがな」
「阿呆かい。知らんは、お前だけじゃ」
「へえ……そうか、そうやったんかいな」
ピコやん、もう一つ納得のいきかねる返事をした。
「柿岡のおやじが、写真入りで、今日もお元気で、明日もお健康で。あのビラ知らんのけ」
「そうか。あれも選挙の走りかいな」
ピコやん、やっと合点がいった。
「くれに張りよった、身体に要領、火も要だ。あれみな選挙のビラやがな」
ピコやん、大仰に辺りに目を配った。

「八百四票で、惨敗やった。ワイらも随分走りまわったもんやった」

追憶の与一。

「ピコやん。敗れた釜ヶ崎日雇代表の為に、一丁、串い合戦といかんかい」

主客転倒、逆にピコやんが、土砂をかけられよった。

「うーん。串い合戦か。やるべきか……、やらざるべきか……うーん。のう……与一よ」

ピコやん、氣取って、訳の判らんことを、言うた。

選挙の真空地帯、釜ヶ崎。政治の底辺、釜ヶ崎。ビラはおろか、演説会すら敬遠された、そこから千にも足らぬ票乍ら、選挙への関心の火の粉を、挙げただけは事実だ。与太な与一ではあるが、その火だけはオキにして、立消えにだけは、したくなかった。

キス（酒）の気もない朝っぱらから、この二人の、オ

ーバーな仕草に、近くの連中耳をそばだてた。
「選挙法にも、立候補の届出の日から、投票前日までしか、運動はでけん。それを一年も二年も前から、金にあかして、ごそごそさらす、知事や市長は、ひっくくれじや」

与一の声に、若干の周囲の連中が、輪を縮めてきた。聞耳を立てていると知って、ピコやん一調子を落しよった。

「先人がかきたてた、釜ヶ崎のホウ火をかざして、日雇諸君の爲に、一丁やるか」

立上って、拳をかざして、四方をぐいと、ヘイゲイした。格闘といい、面つきは満点である。

「扱……と、やるとなると、金がいるな。与一よ」

何をめかす。一体、今日のシャリ代があるのんかい。与一は現実に引戻された。

「費用で……どれ程、いるもんや」

入用も、必要も、ポッポに幾程ありますねん。与一も以上の深入りは、ヤバイとブレーキをかけた。それでも、学のあるところを示した。

「先ず、市会なら十五万円の供託金がある。後は運動次第やろかいな」

「ちがう！ そうはいらんのや、やり方一つで」

ピコやん、与一の耳元に口を寄せた。

「立候補したら、無償の葉書が、十万枚くる。検印済のポスターも、移動事務所の小旗も、よその候補者に、横流しをしたら、皆、金になる。やり方次第で、金はいらん」

どこで聞いたか、よからぬことをささやきよった。

「この問題は与一よ、事務所へ帰って、後援者と、よく相談すっか」

出なんだら、ドヤ代にも困るやろが」

その心配の方が、先にたつらしい。兎に角ピコやんの部屋へ通った。

四人の相部屋。両側に二段の蚕棚、真中に辛うじて、人の通れる隙間がある。それへ坐り込んで、一席を弁じているらしい。

与一の顔を見ると、相部屋の連中、クルッと尻を向けた。

「ピコよ、明日があるん、又聞か」

相部屋の連中がこの調子なら、他はおして知る可しであらう。

聞けば音信不通の郷里の誰彼なしに、立候補と吹きまわって、金の無心をしたそう。

ピコやんの自慢話によると、歓呼の声や、旗の波で、郷里を出たと云うが、石をもて、迫れる如く、国をおん出た。その方が真実らしい。とすれば、金の方も当にはなるまい。

扱それからは、区内の地図を拡げては、策戦とやらを練ったり、知名度を高めるとやらで、町角や、公園で、一人よがりの自己陶醉の、演説を打ちまくっている。勿論、仕事はおっぼりだし。

三角公園の常連も、始めの内は聞いていたが、毎度

どこに事務所があつて、誰が耳をかしてくれる。漫才もどきの掛け合い。のりすぎの、のせすぎの茶番劇。与一、こゝろで幕切れの拍子木を打ちたかった。

春で……おぼろで……お休み日、ピコやん、かすんでいるらしい。別れて、ドヤへ帰って寝た。朝、目が覚めた。与一、昨日のことは、さっぱり忘れていた。仕事に出ると、組の事務所に呼びつけられた。

「与一よ。ピコの奴、正気かいな。偉そうにそっくり返って、市議選に出るから、当分は休む、それに、万四程の前借と、陣中見舞に十萬四程よこせやて、あのドアホ、こゝいかれよったん、ちがうか？」

組のボースン、こめかみ辺りで輪をかいた。流石、与一も驚いた。

「何や、いきってますようで……」

存じてますとも、云い兼ねた。

「ピコはわれのダチ公や。おだてのネタ元は案外、われあたりとちがうか」

お見通し。

「ブル……こつちや知りまへん。減相もおまへんで」早々に引下った。気になるので、仕事の帰りにピコやんのドヤへ立ちよった。管理人がすつとんできた。

「エエのんか！ あれで……まんで、狂人やがな。仕事に

となると、それはそれ、一言居士の多い釜っ子。

「おっさんよ。ほんまにやるんかい」

から始まって、売名やろ、金集めか、果ては正気かいな。とまで冷かされ、折角、高邁なピコやんを傷つけること、おびたらしい。

仕事にも出ないとなると、ドヤ代もどこおる。十年馴染んだドヤも、ほり出されたらしいとの噂。与一はピコやんの独走が、日が経つにつれ、心配になってきた。どこまでが、芝居で、どこまでが正気なのか、そのけじめさえつかなくなってきた。小銭の無心に来たピコやんに、しんみり問い訊してみた。返ってきた返事は、著にも棒にもかからぬ、たわ言である。

無償の葉書を、ポスターを、移動表示の旗を横流しにする。その金の内から、供託金を払う。選挙が済めば、供託金だから帰る。没収規定のあることも御存知なし。運動と云つても、投票前の四五日間を、アルバイトに氏名の連呼をやらす。選挙が済めば、金がごっそり残る。

それにだ。若し仮りに、釜ヶ崎の票がまとまり、当選と云うことも、無きにしもあらず。目下、極秘の必勝戦術を研究中だと云う。

聞くに及んで、与一は啞然とした。撫然とした、全く恐れをなした。

「阿呆らしやの、鐘がなるがな」

鐘どころか、お手々にワッパがはまりますわ。ブルブルじゃ。そう考えながら、そこが気のよい与一のこ

と。
「どやねん。金は出来たんか、ピコやん、うまいこと、いてんのんか」

その都度、僅かの金でも渡してやる。因果な仲で、こ

んなもんかいな。与一はそうあきらめた。
景気づけに行つてやれば、酒の一杯にでもありつけるとか、茶菓子の一つでもが出ると云うなら別として、あんなスカンピン、逆に陣中見舞をおいてゆけ、たかられたらと、ピコやんの平常を知ってる連中は、恐れをなして、寄りつきません。日頃の行状のせいでもある。

どこから調べたか、警察署からピコやんに再三に涉つて、お招きが出た。

呼出してみても、話し合いどころか、四離滅裂。どこが頭で、尾やら判らん筆法でまくしたて、涙と唾み合はん入歯のせいで、よだれまじり、何が何やら、さっぱり判らず。草莽の微臣高山彦九郎が出るに及んでは、掛りの刑事もサジを投じた。告示が出て、届けをして、運動を始めるように、云って聞いただけが、関の山である。

「ほんなら、知事や、市長や、全代議士を全部、ひっく

くつたらどうや。一年はおろか、二年も三年も前からや
ってるわい」

ピコやん、益々野放図になりよるだけ。

そのピコやん珍らしく、日曜日の朝寝の与一の枕元へ
坐りこんだ。

「おい！ 与一よ。俺はゆんべ、絶対当選確実の名案を
考えたがな。絶対当確のや」

何を考えたか、とえらい興奮である。

「どうせ、どうでも、エエ考えやろが」

与一は腹の内では、そう思った。

「与一。この釜ヶ崎に、労働者はどれ程居る」

「二万四千か五千は居るやろかい」

与一は氣のない返事をした。

「そこや、そこやがな。二万五千票とすると、二割取れ
ても五千票や。これだけ取れたら、絶対に当選やろ」

全部が全部に、選挙権が有る訳でもなし、出稼ぎや、
戸籍を憚る者も居る。そのあやまちを話すのも、今の
与一にも、うとましかった。

「二割、たった二割や。草莽の微臣、高山彦太郎、日雇
労働者の同志として、お願いに参りました」

選かれた者のように、上ずった調子で、しゃべり出し
よった。僅かの間に、つらつきもぐつと悪くなった。

与一は両手で、頭をかかえて、耳をおおうた。

「未だ、云うてんのか」

「そやから、名案通りに、レッツゴウや」

ピコやん、与一をゆり起した。

「あのな：与一よ。当選したら、恩にきるがな。お礼は
きつとする。当選したら、五六十万円の月給はくれる。

郊外電車の優待バスがくる。之を又貸しても、エエ金
になる。国鉄のバスは来んのんかいな」

出もせん先から、優待バスの横流しを計る、ピコやん
の悪才覚には、一面笑ってすまされないものがある。

「与一。すまんが、なんぼか、貸してんか。シャリ代も
あれへん」

これだけはピコやんの本音である。

或る日、与一は所轄の刑事に、ふんどまれて、引致さ
れた。勿論、ピコやんの事である。話に依ると、与一が
参謀で、選挙の晩には事務長だと、ふれまわっているら
しい。ピコやん、五千票獲得の絶対迷案なるものに、踏
みきりよつたらしい。

あの日以来、ピコやん、釜ヶ崎の溜り場や、公園で誰
彼なしに捕えて、今度の投票に、兎に角、高山とでも、
彦太郎でもエエ、書いてくれ。鉛筆でなら下敷へきつく
書いて、字型を写す。ボールペンか、万年筆なら、濃い

は出来たんかいな」

とどめを刺すように、与一は聞いた。

「いらんいらん。票の五千も取ったら、文句なしや。葉
書が貰えたら、すぐに供託は済すがなア」

ここまで、トロイおつむとは、与一サラサラ思わなん
だ。

「供託をしかんと、何が出来るねん。十万票を取って
も、無効になるねん」

声を荒らげて云切った。

「そらちがうで！ 与一、選挙は票で決るもんや、一票
でも多いもんが勝や。俺には最後の名案があるねん」

長生せい。与一はごろりと背を向けた。エライ奴に、
土砂をかけた。与一は今度だけは、しみじみと後悔した。

「とにかく、五千票を取るこっちゃ。目標五千票。つま
り釜ヶ崎日雇のたった二割や。軽いかるい」

目に書いて、手の平に写しを取る。それを見せてくれたら、日当は出す。別に一人を連れていけば、一人頭に、千円の増金をつける。支払いは投票日に、三角公園の藤の棚の下でする。

五千票の票を取るのに、幾何いる。今のピコやん、逆さに振っても、入歯を磨く、ソルトの歯みがき以外に何がある。

「サツも結構、お暇と見えまんア」

話の馬鹿ばかりに、与一も精一杯の興味をかました。刑事の話聞く程に、話す刑事も、阿呆らしく。

「なア……」

二の句もつけない模様。

「話を聞きとうても、どこのドヤに居るやら、ヤサが判らん」

飯にも議員に出る男や、エンコのオカンかとも云兼た。

「兎に角、ほっておけんから、手配はする。見つけ次第に、叩きこむ。そない云うというて」

どこまでも与一もグルと、睨まれている。

どこで聞いたか、その夜遅く、ピコやんから早速電話がかかってきた。

「なんじゃいな。ほりこまれてへんのんかいな」

ブタ箱入りでなかったのが、お氣に召さん口吻だ。

の告示がなされた。連呼や、ビラで、街の空気が、ひっかきまわされた。

ここは名古屋、大須の観音の盛り場である。小さなお握り屋の奥で、お仕着の白い割烹着のピコやんが、馴れぬ手付で、お握りの型を抜いて居る。自慢のあごひげはすっぱり、落してある。ピコやん変相のつもりらしいが、へーん、そうかい、と云い度い程に、変り栄えはない。

「兄さん！ もう一寸、手奇麗に、上りまへんか。堅めにしめてと云いましたやろが、お皿へとったらバラバラや。もう一寸、芯を入れてやんさい。トロクサーイ、兄さんじゃ」

たった一人の妹がやっているこの店へ、這々の体で逃げこんだ。お手のものの、空涙をフンダンに流して、塩垂れて、や々と置いてもらった。

勿論、選挙の話も、御用十手の身も、極秘ごくひ。三食付の住込で、日に千円のお小使い。昔に借りた金が無くなるまで、つづくらしい。きつい条件だが、今のピコやん、否応の云える立場でない。万事に神妙に承って、拳々服用にこれとめた。

全国の選挙騒ぎが、汐騒のように引いた。

ピコピコもののピコやんの日日も、幾分落付いた。

ピコやん、のんびり煙草のけむりを輪に吹いている。

「どや、名前の字紋を取るて、前代未聞のグッドアイデアーやろな」

一人で自慢の鼻をうごかした。

「阿呆んだら！ 勝手にエバツとれ。本日只今、ピコよ。お前は全国指命手配のお尋ねもんじゃ。ここまできたなら、一寸やそつとで、納まらんて……」

ピコの声が、一瞬、途絶えた。

「釜はおろか、他府県まで、血眼でさがしよるで……サツが」

おろろの声が、返ってきた。

「よ……与一よ。それほんまかいな」

さまーみされや。

「冗談や酔狂で云えるかい。ほんまのほんま、正真正銘じゃ」

「御用十手の雨が降る……。五尺の身体の置場に困り、四尺九寸になりつまった……」

未だ氣取ってくさる。与一、ふとピコやんが可哀想に思えた。

その日から、ピコやんの話は、フツツリ、釜ヶ崎から消えた。馬鹿でも、チョンでもなかった。与一初めて、ホットした。

全国都道府県、地方自治体をおしなべて、一斉に選挙

「フームー」

又、又何かよからぬことを、考えついた目付になった。「俺は今度はつまり、出ん市会議員やった。前議員があり、元議員があるんならや。出ん市会議員が、あってもエエ訳やなア。そや。つまり俺は、大阪出ん市会議員、高山彦太郎ちう訳や、これからの名刺は之でいこ、之でいこ」

脳の配線が、又どこかで、混乱したか。ピコやん急に釜ヶ崎が、恋しゅうなってきた。そしてこの名刺を、釜ヶ崎一円に振り廻したくなった。

「之なら、サツも何にも云えん筈や」

ピコやん、も一つ大きな、煙草の輪を吹いた。